



覗く眼

第1回

第1回

いち早く春の風を感じた梅の木が、つぼみをふくらませ始めていた。子どもの背丈ほどある草は、まだ萎びた様子のまま。遠くに背の低い家々が点在している。ひい、ふう、みい……もしかしたら、ここから数えるほどだけが、この村の家のすべてかもしれない。

そんな寂しい景色の中に、背広姿の無粋な男二人組がやって来た。

「おやっさん、凄い田舎ですねえ」

紺のスーツの若い男は、周りを物珍しそうに見回す。

「そうだな。まあ、昔はこんな所も多かったけどなあ」

話しかけられた初老の男は、ヨレヨレのスーツで、後数回洗えば穴でも開いてしまいそうなくらいくたびれている。

実際この男、大内源治自身がもうすぐお役御免になる。刑事生活四十数年。数々の難事件に向き合ってきたこの刑事も、もはや本庁では厄介者扱いされかけている。

頑固。昔堅気。思いつきで動く。

もの凄いスピードで進歩をしているこの時代、源治の存在はもはや老害としか捉えられていなかった。

源治もそんな事は百も承知で、この千餓村の事件の担当となった時、一緒に行くのが沢井順平だった事に安堵した。沢井は、源治を立ててくれる、ほぼ唯一の若い同僚だった。

「娘たちが疎開した先もこんな田舎だったそうだ。君は戦争中、どうだったんだ？」

「嫌だなあ、おやっさん。オレ終戦の頃、まだ赤ん坊ですよ。覚えてるわけないじゃないですか」

沢井は頭をかいた。

「おお、そうか」

苦笑いをしたものの、源治は内心で恥じる。歳を感じさせないように喋ろうと思っても、口を開けばこんな風に世代の違いは浮き彫りになってしまう。いつもの事だ。

「おやっさん。あれ、カカシですかね？」

「んんっ」

沢井の言葉に我に返りむき直すと、そこには確かにカカシのような細長いものが身じろぎもせず、じっと立っていた。

「俺、カカシなんて初めてですよ」

そう言いながらも、沢井は何か違和感を感じているようだ。

源治はじっとそれを見つめ、歩き出した。

「おやっさん」

返事は、ない。何かに集中すると、源治は極端に口数が少なくなる。

「馬鹿野郎。あれは、カカシなんかじゃねえよ」

そんな言い方はしなくても良いものだが、一心になると口が悪くなるのも源治の性格だ。そしてそれも、同僚たちから嫌われる理由のひとつだ。

源治はそのカカシのようなものまで後数歩という所まで来ると、ピタリと進むのを止めた。沢

井もそれに従うよう、立ち止まる。

やはり、カカシではない。けれども、これは人間・・・なのだろうか？ 肩幅は確かに、人間の大人のそれだ。けれどもそこから下、腰のあたりが急にくびれ、木の枝のように細くなっている。ぼろきれのような着物を纏っているが、文字通り骨と皮だけのような胴なのだ。そしていっそう奇妙なのが、顔じゅうに薄汚れた包帯を巻いているということだ。頭のとっぺんから顎の先まで、どんな怪我かはわからないが顔全体を覆い隠すようにしている。しかし、源治が気になっている最大のところは、その包帯から一か所だけ覗いている箇所、その右の眼の異様な輝きだった。源治が足を止めたのも、この眼と視線が合ったためだ。

「おい、あんた・・・」

絞り出すようにして、源治が口を開きかけた。けれどもその異様な風体の輩はまるで口など聞いてくれるなどばかりに背を向け、二人の前から遠ざかって行き、姿を消した。

「おやっさん。ありゃあ人間なんでしょうかねえ」

「馬鹿野郎。そりゃ人間に決まってるだろ」

答えながらも、源治には確証が持てない。戦後の焼け野原の中で焼け出されたり食糧難のためにあれに似た姿を見た事がないわけではなかったが、どうもそれとは違う感じがする。

「あいつの眼・・・」

「眼ですか？」

「ああ」

やはり源治が気になるのは、あの眼なのだ。負傷者や飢餓に苦しむ人間が、あんな眼の輝きを放つはずがないのだ。

「今度の事件と、関係があるんですかねえ」

「馬鹿野郎。迂闊な事を言うもんじゃないかねえ」

制しながらも、実は源治も同じことを考えていた。